



お月様の唄

豊島與志雄

お月様の中で、
尾のない鳥が、
金の輪をくはへて、

お、お、落ちますよ、
お、お、あぶないよ。

むかし、まだ森の中には小さな可愛い、森の精達が大勢いました頃のこと、或國に一人の王子がゐられました。玉様の一人子でありましたから、ご大事に育てられてゐました。王子はごくやさしい、

れました。

王子が八歳になられた時、或晩やはりいつものやうに庭に出て、一人て月を見てゐられますと、どこからともなく一人の小さな、頭に矢車草の花をつけた一尺ばかりの人間が出て來ました。そして王子の前にびよこりと頭を下げました。

王子はびつくりされました。そんな小さな人間はまだ見たことも聞いたこともありませんでした。けれども、王子は姿はやさしく心は美しい方でしたけれど、後に國王となられるほどの人でありますので、非常に強い勇氣を持つてゐられました。それで落ち付いた聲で、一尺法師に尋ねられました。

「お前は何者だ？」

一尺法師は歌ふやうな調子で答へました。

「森の精ぢや。お城のうしろの、森の精ぢや。」

王子は微笑んでまたきかれました。

「何しに來たのだ？」

「王子様をお迎ひに。」と一尺法師は答へました。「千

心の美しい方でした。

王子は小さい時から、どういふものか月を見るのが非常に好きでした。よくお城の櫓に上つたり、廣いお庭に出たりして、夜遅くまで月を見てゐられました。月を見てゐると、亡くなられたお母様を見るやうな氣がしました。母の女王は、三歳の時に亡くなられたので、王子はその顔も覚えてゐられませんでしたが、どう考へてもお母様は月に昇つてゆかれたやうに思はれてなりませんでした。それでづつと月を見ては亡くなられたお母様のことを考へてゐら草姫のお使ひで、お城のうしろの森の中まで、まあづまづいらせられ。」

さう言つたまゝ、森の精は、向うをひいて歩き出しました。王子は非常に喜ばれて、その後について行かれました。城の裏門の所まで参りますと、門がすうつと一人て開きました。森の精と王子とがそこを出ると、門はまた元の通り音もなく閉ぢてしまひました。

城のすぐうしろには、白樫の森と言はれてゐる大きな森がありました。森の精はその中に眞直に、はひつてゆきました。王子も黙つてついて行かれました。所が森の middle に來ると、ふいに森の精の姿が見えなくなりしました。王子はびつくりしてあたりを見廻されますと、すぐ前の森の中に廣い空地が開けてゐまして、青々とした芝が一面に生えてをり、その中にいろ／＼な花が咲いてゐました。芝地の眞中には、赤や黄や白の薄い絹の衣を着、百合の花の冠をかぶつた一人の女が立つてゐました。そして王子を

見て、微笑んで手招きをしました。それを見ると王子は、何だか亡くなられたお母様を見るやうな気がして、恐れ気もなくその側に寄つてゆかれました。「まあよく来られました。」とその女は言ひました。



「私は千草姫と申すこの森の女王でございます。今面白いことを、ご覧に入れませう。」

そして千草姫は、聲を高めて言ひました。

「王子様のもてなしに、みんな出てきて躍つてお

い、つ、つ、い、つ、つ、

い、つ、つよにみんな、とんで出る。

王子様のもてなしに、

わあそび、こそび、

くるりと廻つて、くるく〜り。

すると、眼の前の芝地は森の精で一杯になりました。みんな頭には、いろんな草や木の花を一つづつつけておました。そして手をつないで、圓く輪になつて面白い唄を歌ひながら躍りました。

王子はそれを見て、夢のやうな心地になられました。森の精の躍りはいつまでも續きました。いくら續いても飽きないほどの面白い躍りでありました。

「お時間ぢや。お時間ぢや。御殿のしまるお時間ぢや。」と、どこからかふいに聲がしました。すると今まで躍つてゐた森の精達が、一度に高く飛び上つたかと思ふと、地面に落ちつく時にはもう姿が無くなつてゐました。

王子はびつくりして、あたりを見廻されますと、

れ。」

すると、どこからともなく芝地の上に、さつきのやうな森の精が一人飛び出してきました。薔薇の花を一つ頭にかぶつてゐました。そして次のやうに歌ひながら、くるりと廻りました。

ひいとつ、ひとつ、

く〜るりと廻つて、また出る。

すると、菊の花をつけた森の精が出て来ました。

それから二人でまた歌つて廻りました。

ふうたつ、ふたつ、

くるく〜廻つて、また出る。

牡丹の花をつけた森の精が出て来ました。

みいつつ、みつつ、

くるく〜、くるり、また出る。

梅の花をつけた森の精が出て来ました。

よ〜つつ、よつつ、

くるく〜、くるく〜、また出る。

桜の花をつけた森の精が出て来ました。

矢草の森の精が立つてゐました。千草姫はやはり微笑んだまゝ立つてゐました。そして王子に言ひました。

「もう遅くなりますから、今晚はこれきりに致しませう。またお迎ひにあげますから、その時に来て下さいませ。」

王子はもつとそこにゐたく思はれましたが、姫からさう言はれて仕方なしに歸られました。いつのまにか、矢草の花をつけた森の精が出て来て、王子を城の庭まで送つて来ました。

それから王子は、月のある晩は大抵白樫の森の中に行つて、森の精達と遊ばれました。その上千草姫からいろんなことを教へられました。森の精達は、元は野原に住んでゐる野の精でありましたが、野原が開かれて田圃にされてしまひましたので、今では森の中に隠れてしまつて、森の精となつたのであります。そして千草姫は、新しい森の精と元からの森の精との女王となつてゐるのでした。それで姫は

元の野原のことも、今の田圃のことも、前からすつかり知つてゐました。今年の夏には早がすると秋には洪水が出るとか、さういふことを前から言ひあてました。

王子はそれを聞かれると、一々父の國王に申し上げました。國王は笑はれましたが、王子が餘り何度も申されますので、おしまひには試みにその用心をされました。



夏に早がしましても、山奥の泉から水が引いてありましたので、百姓達は少しも困りませんでした。秋のはじめに洪水が出ましても、前から川の堤が高く築かれてゐましたので、少しも田畑を荒しませんでした。そして王子の言葉が一々中るので、王様はじめ御殿中の者は皆、大變に驚きました。そして、いつとなく「王子は神様の生れ變りだ。」といふ評判が國中に擴がりました。王様はどうして先のことを知ることが出来るのかと、いろいろ王子に尋ねられました。王子は千草姫から堅く口止めをされてゐましたので、何とも答へられませんでした。そして遂には王様まで、自分の子は神の生れ變りではないかと思はれるやうになりました。

出来ないことがありました。それは毎晩月を出すことが出来ないことでありました。月が輝いた晩でなければ、千草姫は迎へに来てくれませんでした。

けれども宵に月が出る時は、いつも矢車草の森の精が御殿の庭まで迎へに来てくれました。王子は千草姫の所へ行つて、御殿の戸がしまる十時少し前に歸つて来られました。所がある晩、いつものやうに白樫の森の中の芝地へ王子が行かれますと、千草姫は非常に悲しうな顔をして立つてゐました。またその晩は、森の精さへ一つも出て来ませんでした。王子は何となく胸をどきどきさせながら、姫に尋ねられました。

「今晚はどうなされたのです。」
「今に悲しいことが起つて参ります。」と千草姫は答へました。王子はいろ／＼尋ねられましたが、千草姫はどうしても譯を言ひませんでした。たゞ「今に分ります」と答へるさきりでした。
王子と千草姫とは黙つて芝地のの上に坐つてゐまし

た。月の光りが一面に落ちて来て、草の葉や花瓣や木の葉をさら／＼と輝かしてゐました。やがて千草姫はほつと溜息をついて言ひました。

「もうお目にかゝれないかも知れません。」
それをきくと、王子は急に悲しくなりました。「お時間ちや、お時間ちや。御殿のしまるお時間ちや。」と、うしろで歌ふ聲が聞えました。
見ると、いつのまにか矢車草の森の精がうしろに立つてゐました。それでも王子は歸らうとされませんでした。けれど千草姫は、ひりに王子を慰めて歸らせました。

王子にはどうしても、千草姫にもう逢へないといふわけが分りませんでした。そして、千草姫は自分の亡くなつたお母様ではないかしら。」と、ふと思はれました。それで、尋ねてみようと思つてふり返られると、もう千草姫はそこにゐませんでした。
王子は御殿の庭に立つたまゝ、も一度千草姫に逢はなければならぬと決心されました。(つづく)



お月様の唄 (つきのうた)

豊島 與志雄

それから王子は、月のある晩はいつも庭に出て、森の精を待たれました。けれど森の精は一向迎へに來てくれませんでした。王子は悲しさうにお城の裏門の方を眺められました。その鐵の戸は嚴しく閉め切つてありまして、いくら王子の身でも、それを夜分に開かせることは出来ませんでした。王子はいろ／＼思ひ廻された上、遂にお守役の老女に譯を話して、白樫の森に行けるやうな手段を相談されました。老女は大層王子に同情しまして、い

或日王様が庭を散歩してゐられます處へ、王子と老女とが出て參りました。老女はかう王様に申し上げました。
「このお庭は、月夜の晩はそれは綺麗でございますけれど、餘り淋しすぎます。お月見の時に一晩だけお城の門をすつかり開いて、城下の人達を自由にはひらせて、皆で踊らせたらどんなにか面白いこととございませう。」
王子も傍から申されました。
「それは面白い。お父様、さう致さうではございませ

せんか。」

二人がしきりにすゝめますものですから、王様も承知なさいました。そしてすぐに、その用意を家來に言ひ付けられました。

その晩は大變な騒ぎでありました。王様は櫓に上つて、大勢の家來達と酒宴をなされました。お城の門は表も裏もすつかり開け放されて、城下の人達が大勢はひつて來ました。皆美しく着飾つて、お城の庭で踊りを致しました。方々ていろ／＼な音楽も奏されました。晴れた空には月が澄みきつてゐました。燈火は一切ともすことが許されませんでした。お城全體が、月の光りと音楽と踊りといふ香ひとで湧き返るやうでした。

王子はお守役の老女と二人で、そつと裏門から忍び出られました。そして老女を白樫の森の入口に待たせて、自分一人森の中にはひつてゆかれました。所が例の空地の處まで行かれましたも、誰も出て來ませんでした。あたりはしいんとして、高い木の

柵から月の光りが滴り落ちてゐるきりでした。お城の中の賑やかな騒ぎが、遠くかすかにどよめいてゐました。

王子は長い間待つてゐられました。眼に涙をためて、「千草姫、私です。」とも叫ばれました。けれども姫も森の精も姿さへ見せませんでした。

とう／＼王子は涙を拭きながら、思ひ諦めて戻つてゆかれました。森の入口に待つてゐた老女が何か尋ねても、王子はたゞ悲しさうに頭を振られるのみでした。

王子は考へられました。なぜ千草姫は出て來てくれないのであらう。悲しいことが起ると言はれたがそれはどんなことだらう。姫は亡くなられたお母様のやうな氣がするが、ほんとにさうだらうか。なぜ私に何にも教へてはくれないのかしら。

そのうちに、悲しいことゝいふのが實際に起つて來ました。城下の或金持が、白樫の森の木をすつかり切り倒して材木にし、その跡を畑にしてしまふと

いふのです。城下にはだん／＼人がふえてきまして、新たに家を建てる材木が澤山いりますし、五穀を作る田畑も澤山いるやうになつたのです。誰も反對する者がなかつたので、王様も金持の願を許されました。

王子はそれを聞かれて非常に喫驚され、いろ／＼王様に願はれましたが、もう許してしまつたことだからといつて、王様は聞き入れられませんでした。

王子は悲しくて悲

しくて、毎日ふさいでばかりゐられました。けれどもそんなことには頓着なく、白樫の森は一日々々と無くなつてゆきました。



たゞ不思議なことには、森の大きな木が切り倒される度に、いろんな聲がどこからともなく響きました。——鳥、鳥、赤い色。——鳥、鳥、青い色。——鳥、鳥、紫。——鳥、鳥、緑色。——鳥、鳥、白い色。……そしてその度に、赤や青や紫や緑や白や黒や黄やその他いろんな色の鳥が、森から飛んで逃げました。王子は森の側に立つて、鳥の飛んでゆく方を悲しうに眺められました。

けれども、樵夫共にはそれらの聲が少しも聞えませんでしたし、また彼等は、いろんな色の鳥を見ても別に怪しみもしませんでした。森の木はずん／＼無くなつてゆきました。愈々、森の奥の空地の近くまで木がなくなつた時王子はもうちつとしてゐることが出来なくなりました。その日の晩は、丁度満月で、いつもより月の

光りが美しく輝いてゐました。

王子は一人で、お城の裏門の所まで忍び寄せられたが、門は堅く閉め切つてありました。王子は、口惜し涙にくれて、誰か門を開いてくれるまでは、夜通してもそこを動かまいと、強い決心をなされた。

その時、不思議にも、門の戸がすうつと獨りてに開きました。王子は夢のやうな心地で、そこから飛び出してゆかれました。

木が無くなつた跡の森は、丁度墓場のやうでした。大きな木の切株は、石塔のやうに見えました。王子はその中を飛んでゆかれました。まだ木立が残つてゐる奥の方の空地の處まで来て、王子はほつと立ち止まられました。見るとそこには誰もゐませんでした。「千草姫！」と王子は叫ばれました。何の答もありませんでした。

暫くすると、王子のすぐ側でやさしい聲が響きました。

「王子様！」

王子は喫驚されて、今まで垂れてゐた頭を上げて見られると、そこに千草姫が立つてゐました。王子はいきなり姫にすがりつかれました。「よく来て下さいました。とう／＼お別れの時が参りました。」と姫は言ひました。

王子は嬉しいやら悲しいやらで、口も利けないほどでありましたが、暫くすると、いろ／＼なことを一緒に言つてしまはれました。

「なぜお別れしなければならぬのですか。なぜ私をちつとも迎へに来て下さらなかつたのですか。お月見の晩にこゝへ来ましたのに、なぜ逢つて下さらなかつたのですか。あなたは亡くなられたお母様ではありませんか。言つて下さい。私に聞かして下さい。私はもう側を離れません。お城の中へも歸りません。」

千草姫は何とも答へませんでした。そして王子の手を取つたまゝ、芝生の上に坐りました。

千草姫は言ひました。

「私はあなたの母様ではありません。けれども私の母のやうに思はれるのは、悪いことではありません。私達は、あらゆるものを生み出す大地の精なのですから。た



だ悲しいことには、いつかは私達の住む場所が無くなつてしまふやうな時が参るでせう。私達は別にそれを怨めしくは思ひませんが、このまゝでゆきますと、可哀さうに、あなた方人間は一人ぼつちになつてしまひますでせう。」

もう翼を擴げて飛び上りました。王子は一生懸命にその尾にすがりつかれますと、尾だけがぬけ落ちて王子の手に残りました。あたりの小鳥は悲しい聲で鳴き立てましたが、もう森の精ではなくて鳥になつてゐますので、その意味は王子に分りませんでした。

王子はぼんやり立つてゐられますと、どこからか矢草草の花をつけた森の精が出て來まして、腕輪と黒い鳥の尾とを手にしてゐられる王子を、も城の中に送り返してくれました。

その後、白樫の森はすっかり切り倒されて畑になり、城下には立派な町が出來ました。けれどもどうしたとか、月が毎晩曇つて少しも晴れませんでした。そして次のやうな唄が、城下の子供達の間にはやり出しました。

お月様の中で、
尾のない鳥が、
金の輪をくらはへて、
お、お、落ちますよ、

王子はその言葉聞かれると、何故ともなく非常に淋しく悲しくなりました。そして二人は長い間黙つたまゝ、悲しい思に沈んでゐました。月がだんだん昇つてきて、丁度眞上になりました。その時、千草姫はふと頭を上げて月を見ました。「もうお別れる時が参りました。これを記念にさし上げますから、私と思つて下さいまし。」さう言つて、千草姫は片方の腕輪を外して王子に與へました。

その時、どこからともなくいろんな色の小鳥が出て來て、千草姫のまはりを飛び廻りました。王子は喫驚してその小鳥を眺められました。

「これでお別れ致します。」さういふ聲がしましたので、王子はより返つて見られると、もう千草姫の姿は見えないで、そこに眞黒な大きい鳥がゐました。嘴に千草姫の片方の腕輪をくらはへて、羽は皆百合の色瓣の形をしてゐました。その鳥は王子の方へ一つ頭を下げたかと思ふと、

お、お、あぶないよ。

月の光りが少しもさしませないので、國中の田畑の物はよく成長しませんでした。草木が大きくなるには露と月の光りとが大切なのです。國中は貧乏になり、人々は陰氣になりました。それで王様も非常に困られて、位を王子に譲られました。

王子は、白樫の森の跡に、木を植ゑさせて小さな森を作られ、その中に宮を建て、千草姫から貰つた腕輪と鳥の尾とを祭られました。それから急に月が晴れ、五穀がよく實り、國中の者が喜び樂しみました。そして満月の度毎に、お城の門をすつかり開いて城下の者も呼び入れ、月見の會が催されました。

今でもその神社と森とは残つてゐます。森の中にはいろんな色の小鳥が澤山住んでゐます。これは神社の前で小鳥の餌を賣つてゐる婆さんの話です。婆さんはその話をする時、いつもおしまひには小さな聲で「お月様の唄」を歌つてさかされてくれます。(をはり)